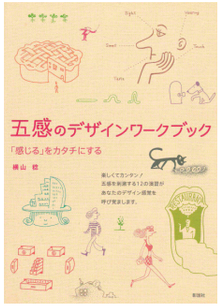
Design Keyword 花、デザインを語る

フラワーデザインの主役はあくまで植物であり、デザインはその主体に導かれます。しかし、デザインの分野は多岐にわたります。
花とは違うマテリアルを使うデザイナーは、何を考え、何を見、デザインをどうとらえているのか。
フラワーデザイナーの新たな視点を見いだすことができるかを探ってみます。

インテリアデザイナー・文化学園大学造形学部建築・インテリア学科
大学院グローバルファッション専修教授

横山　稔
Minoru　YOKOYAMA

東京生まれ。日本大学理工学部建築学科卒業、アメリカ・ニューヨークプラット大学大学院インテリアデザイン学科修士課程修了。東京インテリアプランナー協会理事。アメリカのGensler and Associates Architectsや、日建設計インテリア部（東京本社）などの企業を経て、アリゾナ州立大学デザイン学部インテリアデザイン学科助教授などを歴任。主な研究分野は五感のデザイン、木造建築継手、オフィスデザイン、指輪のデザインなど多岐にわたる。



五感を刺激する12の演習を紹介した横山さんの著書『五感のデザインワークブック「感じる」をカタチにする』（彰国社）。写真右は花入れ。本の上に置かれた指にはめらているのは「awaseru」という作品。いずれも継手をモチーフにした作品。

ほぞをつくることによって、2つの指輪が1つのオブジェになるというコンセプトの作品「awaseru」。写真右／横山さんが座る縁台も継手をモチーフにしたもの。座る部分に継手の技法が使われているので、縁台の足となる黒のボックスに分解して収納できます。

インテリアデザイナーとして、教育者として教壇に立つ横山稔さん。手がけたインテリア空間作品には、Meiho Facility Worksとのコラボレーションによる「六本木ヒルズYAHOO JAPAN!」や「汐留日本テレコム本社」などがあり、また伝統技術を応用した木造建築継手家具作品は、国立民族学博物館のパーマネントコレクションに選定されています。継手の技術を応用したウエディングリング「awaseru」はドイツの「iF design award 2014」でプロダクトデザイン賞を受賞。そんなデザイナーとしての顔以外に、五感とデザインの関係性に着目した著書『五感のデザインワークブック』（彰国社）が2013年度グッドデザイン賞（教育方法）を受賞しそれを用いて大学でデザインを教えています。今回は、そんな横山さんにインテリアデザインについて伺いました。

留学で得たデザイナー、教育者としての道

インテリアデザインの領域はとても広く、私は指輪から都市計画まで手がけました。魅力は依頼された方の喜びの瞬間に立ち会えるということではないでしょうか。ある空間をつくり、そこを使用する人たちの気持ちや行動に影響を及ぼすということはすばらしいこと。政治家は言葉で人を魅了するが、インテリアデザイナーは空間で人を魅了するということを私はよく言います。それがインテリアデザインの醍醐味だと考えています。

父は建築家、祖父は宮中のインテリアを手掛けた指物師という家に生まれ、大学は建築学科に進学しました。物心ついた時から建築にかかわるものが身近にあったこともあり、建築学科に進みましたが、インテリアデザインに興味を持ったのは在学中のことでした。今も南青山にある「カフェ レ ジュ グルニエ」というカフェの内装に魅せられたのがきっかけです。インテリアにこだわり、アンティーク調の雰囲気のいい店で、1980年代当時、先駆的なカフェでした。

歴史的に日本では、インテリアデザインは建築の一部として見られ、どうしても建築重視の傾向にあります。そこで、インテリアデザインの分野が確立されていたアメリカで学びたいと思い、ワシントン州立大学へ交換留学します。その時に指導を受けたのが、デザイナーであり、教授でもあったロバート・リー・ウルフ氏です。

私は作品制作のため大学の教室に泊まり込むことも多々ありました。夜中に制作し、そのまま寝袋で寝るということをしていたのです。制作を終え、眠りについてから、ロバート氏は作品を確認し、気になったものに付箋をつけてくれていました。朝目覚めると、コーヒーをいれてくれ、付箋のある作品について指導してくれたのです。私にとっては感動的な経験で、インテリアデザイナーとして、また教育者としての将来の夢を持つようになっていきました。

五感を刺激することの大切さ

留学を終え、大学卒業後、インテリアデザイナーとして日本の大手設計事務所に入社しますが、デザイナーとしてだけではなく、教育者への思いもあり再渡米します。進学したのは、インテリアデザインで評判の高いニューヨークのプラット大学。ここの大学院で最初に教わったのが、なんと護身術でした。

80年代のニューヨーク、ブルックリンは治安が悪いこともあり身を守るための授業がありました。街中では銃撃戦が起こることもあり、聴覚や臭覚など、五感を意識して使うようになります。そんな五感を働かせるうち、デザインにも応用できるのではと考えたのが、著書にもした五感のデザインです。これは、知識や技術だけではなく、五感を鍛えることでよりよいデザインをめざすというもの。

人は幸せな時ほど、大げさなアクションをします。それは全身で味わった幸福感であり、五感で味わったことの表れです。だからこそ、提供する側のデザイナーも五感を意識しなければならないと思うようになったのです。

小学校の授業で電子化の流れがありますが、教科書の紙をめくるという行為、植物から作られた紙というものに対しての親和性はとても大切です。また、プラスチック容器ではなく、漆の椀などを触ると、かすかに湿度を含んでいるため肌にしっくりきます。そのあたりの微妙な感性というのは日本人にはわかると思います。そういう五感で味わうことの重要性を忘れないでほしいです。

この日本人の感性、さらに育んできた文化を考えた時、祖父が指物師であったこともあり、伝統的な建築技法である継手によるデザインを発想しました。これも留学中のことであり、外から日本を見ることで、再認識できたのかもしれません。

2020年には東京オリンピックが開催されます。かつて日本人は、生活空間に彩りを添える四季の変化とともに暮らしてきました。伝統的な日本のインテリアでは、季節にあった花を活け、建具を入れ替え、雨音のリズムを楽しんだりと、外界とのかかわりを積極的に求めてきました。

日本人の持っているそうした感性をフラワーデザインの分野においても、五感を意識して使うことで、新たなデザインの方向性が見えてくるのではないでしょうか。